

# 考動・躍動・感動

## “心の強い人” になろう!

世界レベルの選手に負けても「しょうがない・・・。」と思う選手もたくさんいるだろう。しかし、小池選手は決して嘆くわけでもなく、諦めるわけでもなく、常に前を向き努力し続けている。きっと「**心が強い**」のだろう。もし、みんなが同じ立場だったら、どんな心境になるだろう。『これからの人生いろいろなことが待っているだろうが、逆境になった時にこそ、前を向き努力し続けられる人でありたい。』先生自身、強く心に感じた。

### 2 番手人生とは言わせない

2 位が定位置。陸上男子短距離の小池祐貴（北海道・立命館慶祥高）はそんな状況と戦っている。「ほぼ、確実に負けることが分かって試合に臨む。どうやって、モチベーションを保つかが難しい」。

同学年には、100 ㍎で日本歴代 2 位の 10 秒 01 を持つ桐生祥秀（京都・洛南高）がいる。100 ㍎は高校総体も国体も桐生に歯が立たず、2 位。19 日の日本ジュニアの 100 ㍎は優勝したが、桐生不在のレースだった。20 日の 200 ㍎は桐生に次ぐ 2 位だった。



日本ジュニア選手権 200 ㍎決勝で 2 位となった小池祐貴。左は優勝した桐生

陸上短距離の小池

100 ㍎の自己ベストは 10 秒 38。例年なら高校生のトップになれる記録だが、桐生という強烈な光が小池を陰へと追いやる。「彼の存在が常に練習でもちらつく」。でも、現実から逃げたいはない。「桐生が同じ世代で残念だとは思っていない。2、3 年生で差が開いた。それは彼にあって、自分にはないものがあるのだと思う」

2 位という地位を受け入れるのはたやすいことではない。だから、考えた。「2 番だから負けたという意識だと、レースに臨むときにこれから負けにいくと思ってしまう。だから、次はこのレベルまでいけば OK という基準をつくって臨んでいる」。例えば、目標のタイムを設定し、その記録と「勝負」することもある。

「彼に勝たないと、世界で戦える選手になれない。自分のピークの年齢になったら、勝負したい」。桐生に先着する思いを捨てたわけではない。

確かに現時点では「敗者」かもしれない。でも、それは高校生の時の結果に過ぎない。競技人生は長く続く。陸上を始めて 3 年目の高校 3 年生。今は「絶対的な 2 番手」だが、そのゴールはもっと先にある。（小田邦彦）



10月23日(水)朝日新聞

### 【来週の主な予定】

28日(月)：事業所へのあいさつ

30日(木)：合唱祭 委員会(後期最初) ※弁当

1日(金)：エンディングセレモニー

合唱祭表彰

※ 事業所へのあいさつは 5 時間目から出発します。場所によっては少し下校が遅くなるので、家族に伝えておきましょう。

事業所の都合で別日にあいさつに行くことになった人は、5 時間目は学校で自習をします。あいさつに行く日を自分で家族に伝えておきましょう。